

建設通信新聞

— 連載 —

建設通信新聞

《色》で築く現場の安全



(一社) 日本ユニバーサルカラー協会 代表理事

南 涼子

2023年6月6日～7月18日 掲載

(株) 日刊建設通信新聞社

この冊子は、(一社)日本ユニバーサルカラー協会代表理事の南涼子氏が2023年6月6日から7月18日まで『建設通信新聞』紙上に連載した寄稿“《色》で築く現場の安全”(全6回)を再録したものです。建設現場における色彩活用という、これまで見過ごされてきた視点からの斬新な提言です。現場の安全性向上に資する貴重な提言としてお役立ていただければ幸いです。付録として過去のインタビュー記事や書籍紹介記事も再録しました。なお再録に当たっては南氏の上承を得て一部加筆修正を施しました。

2023年7月(株)日刊建設通信新聞社



協会ロゴマーク

南 涼 子 (みなみ りょうこ)

(一社)日本ユニバーサルカラー協会代表理事。色彩専門家歴25年。介護・医療施設から建築空間、製品デザインまで幅広い分野の色彩計画や監修を手掛け、全国での講演、執筆活動、大学での講義を行っている。近著に《一瞬で心が整う「色」の心理学》(青春出版社)、《今と未来がわかる色彩心理》(ナツメ社)、《色彩心理 配色アイデアブック》(ホビージャパン)など。



協会HP



南涼子の facebook



協会インスタグラム



南涼子のブログ (Amebro)

WEBで読む「建設通信新聞」
 建設通信新聞Digital
 =>http://kensetsunews.com
 PCで「建設通信新聞」記事検索・メール配信
 日経テレコン21/Factiva/G-Search/NewsWatch
 工事情報の検索なら「建設工事の動向Digital」
 =>https://ugoki.kensetsunews.com/

THE KENSETSU TSUSHIN SHIMBUN
建設通信新聞
 Architectures, Constructions & Engineerings News (Daily)

2023年(令和5年)6月6日(火曜日) (第一種郵便物認可)

多様な人・企業が共創・共感するまちに

東急不動産 4開発を面的連携



深谷プラザ原宿「ハラカド」 代々木公園Park-PF計画 Forestgate Daikanyama Shibuya Sakura Stage

東急不動産は、多様な人・企業が共創・共感するまちに、4つの開発を面的連携で進めている。1つは、代々木公園Park-PF計画。2つは、深谷プラザ原宿「ハラカド」。3つは、Forestgate Daikanyama。4つは、Shibuya Sakura Stage。この4つの開発は、それぞれ異なるコンセプトを持ち、地域の魅力を最大限に引き出すことを目指している。また、それぞれの開発は、互いに連携し、地域の発展に貢献している。

東急不動産は、多様な人・企業が共創・共感するまちに、4つの開発を面的連携で進めている。1つは、代々木公園Park-PF計画。2つは、深谷プラザ原宿「ハラカド」。3つは、Forestgate Daikanyama。4つは、Shibuya Sakura Stage。この4つの開発は、それぞれ異なるコンセプトを持ち、地域の魅力を最大限に引き出すことを目指している。また、それぞれの開発は、互いに連携し、地域の発展に貢献している。

東急不動産は、多様な人・企業が共創・共感するまちに、4つの開発を面的連携で進めている。1つは、代々木公園Park-PF計画。2つは、深谷プラザ原宿「ハラカド」。3つは、Forestgate Daikanyama。4つは、Shibuya Sakura Stage。この4つの開発は、それぞれ異なるコンセプトを持ち、地域の魅力を最大限に引き出すことを目指している。また、それぞれの開発は、互いに連携し、地域の発展に貢献している。

建造物保存も良いが

建設
 建造物保存も良いが、一方で、新しい建造物の建設も必要である。古い建造物の保存は、地域の歴史や文化を伝える重要な役割を果たしている。しかし、古い建造物の保存だけでは、地域の発展を促すことができない。新しい建造物の建設は、地域の魅力を高め、観光客を呼び込むための重要な手段である。また、新しい建造物の建設は、地域のインフラを整え、生活の利便性を高めることもできる。したがって、古い建造物の保存と新しい建造物の建設の両方を推進することが、地域の持続可能な発展につながる。

《色》で築く現場の安全
第1回 色彩活用が遅れる建設現場
 日本ユニバーサルカラー協会
 代表理事 南 涼子

私たちの日常において色は、情報（ビジュアルコミュニケーション）として機能しています。視覚、聴覚、嗅覚、味覚の五感のうち、情報の約90%は視覚によってもたらされ、色彩はその大半を占めています。また色は遠くからでも容易に認識できるだけでなく、文字や形、動きに比べて最も早く伝わる情報です。色彩は目に入る複数の情報を一瞬に判断できるという点でも極めて有効で、「区別」「識別」「認識」「予測」を促す重要な役割を担っています。さらには現場に最も危険な色で可視化することにより、作業員の注意喚起、危険予知を促し「ヒヤリハット」を未然に防ぐのにも役立ちます。

色彩が人間の行動全般に深く関わっていることは、近年世界各国の大学や研究機関のデータでも明らかになってきました。色は人間の感情だけでなく、思考や判断、行動に大きく関与しており、生体には交感神経や自律神経の働き、ホルモンの分泌、血圧、心拍数、呼吸数、集中力、睡眠の質、疲労の回復にも影響を与えます。意識するしなにかかわらず、色は体のコンディションと仕事のパフォーマンスを左右するため、効果的に使えば即座に不安行動や危険行動の回避に役立ちます。

カラー心理学 Color Psychology

色彩心理学（Color psychology）は、色彩が人間の心理や行動に与える影響を研究する学問です。色彩は人間の感情や行動に大きな影響を与えます。例えば、赤は興奮や危険を連想させ、青は冷静さや信頼を連想させます。また、色彩はコミュニケーションの手段としても活用されています。建設現場では、色彩を活用して安全を確保することが重要です。例えば、危険な場所や作業区域を赤や黄色で可視化することで、作業員の注意を喚起し、事故を防止することができます。また、色彩を活用して作業効率を向上させることもできます。例えば、作業服や作業道具の色を統一することで、作業の効率性を高めることができます。したがって、建設現場では色彩心理学の知識を活用し、安全と効率性を確保することが重要です。

建設現場では安全確保が最優先事項です。色彩心理学（Color psychology）は、色彩が人間の心理や行動に与える影響を研究する学問です。色彩は人間の感情や行動に大きな影響を与えます。例えば、赤は興奮や危険を連想させ、青は冷静さや信頼を連想させます。また、色彩はコミュニケーションの手段としても活用されています。建設現場では、色彩を活用して安全を確保することが重要です。例えば、危険な場所や作業区域を赤や黄色で可視化することで、作業員の注意を喚起し、事故を防止することができます。また、色彩を活用して作業効率を向上させることもできます。例えば、作業服や作業道具の色を統一することで、作業の効率性を高めることができます。したがって、建設現場では色彩心理学の知識を活用し、安全と効率性を確保することが重要です。



2023年6月6日から毎週火曜日の最終面で6回にわたり連載した



《色》で築く現場の安全

第1回 色彩活用が遅れる建設現場

日本ユニバーサルカラー協会
代表理事
南 涼子

(めなみ・りょうこ) 日本ユニバーサルカラー協会代表理事。色彩専門家の南涼子。介護、医療従事者から高齢者デザインまで幅広い分野の色彩計画や色検定を執り、全国で「第一線の色彩」の講演やセミナーを開催。近年「今更なる色彩の活用」(ナメバロ)、「高齢者対応の色彩」(ホーヒーバロ)など。

読者の皆さま、はじめまして。色彩専門家の南涼子と申します。私は元々介護福祉、医療分野の色彩デザインや監修を専門とし、視覚機能の低下した高齢者や認知症の高齢者のため安全で快適な環境づくりに長年取り組んでまいりました。建設現場については数年前、場内誘導や監視カメラに8月間携わったことがあり、そこで安全という視点から現場における色の使われ方について多くの気づきを得ました。そうした経験を踏まえ、改めてわたって建設現場の安全管理や作業の効率化に役立つ「色の使い方」についてお話ししたいと思います。

私たちの日常において色は、情報(ビジュアルコミュニケーション)として機能しています。視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚の五感のうち、情報の約9割は視覚によってもたらされ、色はその大半を占めています。また色は遠くからでも容易に認識できるだけでなく、文字や形、動きに比べて最も早く伝わる情報です。色は目に入る複数の情報を一瞬に判断できるという点でも極めて有効で、「区別」「識別」「認識」「予測」を促す重要な役割を担っています。さらには現場に潜む危険を色で可視化することにより、作業員の注意喚起、危険予知を促し「ヒヤリハット」を未然に防ぐのにも大いに役立ちます。

色彩が人間の行動全般に深く関わっていることは、近年世界各国の大学や研究機関のデータでも明らかになってきました。色は人間の感情だけでなく、思考や判断、行動に大きく関与しており、生理学的に交感神経や自律神経の働き、ホルモンの分泌、血圧、心拍数、呼吸数、脈拍、瞳孔の径、視力の回復にも影響を与えます。意識する・しないにかかわらず、色は体のコンディションと仕事のパフォーマンスを左右するため、効率的に作業を推進しなくとも安全行動や危険行動の両方に役立ちます。



オレンジ色は危険を知らせる色

他業種では、工場などで色彩を効果的に取り入れている事例が多く見られます。例えばヤマハ発動機では、無機質で冷たい管理室になりがちな工場空間を心理学の観点から配慮した色彩計画によって改善し、快適で安全な作業環境を実現しています。この事例では労働効率向上だけでなく、不良品を減少させる効果も確認されています。また私自身が手掛けた事例としては、アパレル業務員の作業に色を取り入れてストレス軽減を図り、業務の効率化と安全性の向上に役立てたという試みもあります。

たCP (Color psychology=色彩心理) ラインが近年多く設置されるようになり、「歩みスマホ」で注意力が分散している人や高齢者、視覚障害者の転落防止など安全管理に役立てられています。また駅や街路における列車への飛び込み対策として2008年に「青色灯」が東京の山手線全29駅に設置され、12年には自殺者数が平均約84%減少したという東京大学のデータも報告されています。こうしたことから見て、色は人間の行動に少なからず影響を与えていることが分かります。

さて、建設現場では安全区分や階段、設備などに目立つ色でマーキングするなどの対策こそ見られますが、まだ積極的に効果的な活用には至っていないのが実情です。独自に色の基準を設けているところもありますが、現場によってそのルールはまちまちです。昨今の作業員の高齢化や国際化が進んでいますが、そうした人たちがより働きやすく、安全に作業するためにも、色彩の扱いの効率化や統一が必要だと思います。色は万国共通の「ユニバーサルランゲージ」としての機能を持っています。現在多くの企業が取り組んでいる「SDGs」(持続可能な開発目標)や「ダイバーシティ&インクルージョン」といった観点からも、建設現場の色使いの効率化や統一は不可欠と考えるべきです。

次回から、具体的な事例を交え現場における効果的な色彩活用についてお話ししていきます。



建設現場の安全管理に役立つ色彩活用についてお話ししていきます



《色》で築く現場の安全

第2回 ゲートの色分けで視認性アップ

日本ユニバーサルカラー協会
代表理事
南 涼子

色彩専門家の南涼子です。連載2回目となる今回から、具体的に現場で色をどう役立てるかについてお話ししていきます。前回、建設現場の場内誘導に携わったことをお話ししましたが、その経験からゲートの視認性(目で見たときの認識のしやすさ)の改善が必要だと感じました。大規模な建設現場ではゲートが複数設置されていますが、間違えてゲートに車を突っ込んでしまうことがしばしばあります。こうした場合、他の出入車両の進行を妨げることにもなりかねず、ドライバーも誘導員も混乱してしまい、その根拠から後継車種のリスクが高まります。ドライバーも立場ごとが多く、スペースに余裕がない現場ではその対応に苦勞といったケースにも多く出たことがあります。

実際、間違えて進入した車はドライバーから「閉り」の交通標識に気を取られているからアルファベットや数字だけでは分かりにくい」という声も多く聞かれます。特に初めて現場ではそうしたケースが頻発

にあるようです。建設現場のゲートの多くはオーディオン(錠)がタイロの状態をしており、その色はほとんど白またはシルバー系です。複数のゲートを区別するために色分けを施す必要があり、視認性を高めるための色分けが望ましいと思います。例えば道路から見えるよう入場ゲートごとに色の異なるカッティングシートを貼る、あるいは色の異なる標識や大きな旗を設置するなど、工夫次第でゲートに色分けを行うことは可能だと思います。目的のゲートを視覚的に分かりやすくすることは、搬入ドライバーのストレス軽減につながり、現場内でも安全な安全運転を心掛ける心算状況をつくり出せるはずです。

国際化に備えゴミ箱の色分けも
次に色彩を活用したいのが廃棄アースのゴミ箱の色です。現在建設現場では約11万トンの外国人が作業に従事しており、その国籍はペトナムをはじめ約10カ国以上に上ります。国際化が進む中、現場でも多国籍に対応する必要があるとされており、特にこの分別については頭を悩ましており現場ではそうしたケースが頻発

建設現場のゴミ箱の種類は大体8-12項目ほどで、ごみの細かなルールを多言語で伝えるのはとても簡単ではありません。集積箱に直接文字で表記するにしても、それだけの種類の言語を表示できるはずもなく、現実的ではありません。ごみ集積箱は色そのものを要する、ふたをカッティングシートや紙で目立つように色分けすることをお勧めします。色分けした上で、どの色のごみ箱に何を捨てるかを各国籍で具体的に明記した指示看板をせば、現場入り口にしても手前を掛けるに円滑に理解できると思います。

パイロンの色もルール化

パイロン(カラーコーン)の色も着目してみました。危険区域に赤、安全通路に緑、資材置き場に青などルールを設けているところもありますが、現場によってバラバラで、使われる色も場所によって道路確保なのか立入禁止エリアなのか統一がないことが多々あります。また赤いコーンを敷く中で緑や黄色、オレンジ、青が混ざっているケースも多くあります。「とりやめず」とその辺にあるパイロンを置いておいたという感じでした。色の意味を明確にして一貫性を持たせ、全ての現場で統一すれば、危険エリアと安全エリアを区別しやすく、安全の危険が一瞬で「見える化」するはずです。色は任意にも併用されるため、意味を明確にして統一すれば、安全に対する意識をより一層高められると考えます。



現場の色分けがしっかりできていない現場は、危険エリアへの立入り事例がほとんど見受けられ、事故が少なくもなっています。大手ゼネコンなどでつくる建設防衛安全研究会によれば、同じ色のパイロンを現場で、立入禁止区域等に区別していた現場は3色のパイロンを使って、「青色を作業ヤード・危険区域」「青色を資材置き場」「青色を安全通路」と決めておくと、安全通路、危険区域の色で明確に識別できるようになり、接触事故などを未然に防ぐ可能な現場現場も報告されています。



建設現場の安全管理に役立つ色彩活用についてお話ししていきます



《色》で築く現場の安全

第3回 ワイヤ点検でも色活用

日本ユニバーサルカラー協会
代表理事
南 涼子

厚生労働省と中央労働災害防止協会が定めた安全衛生管理マニュアルによると、現場パトロールの役割は「主に目で見て分かる安全要素について、現場に存在する顕在化した、あるいは潜在化している災害の発生チェックリストを用いて確認し、探してつぶすこと」としています。目で見て分かる安全要素を把握する上で、色は非常に効果的な手段です。

その一つに「ワイヤの点検」があります。建設現場では、クレーンの吊钩など構造物に必要ワイヤロープの点検が正しく行われたかどうか(点検色)を設定し指示するのが一般的です。ほとんどの現場では「黄」や「白」など赤・青・黄といったビニールテープをワイヤに巻いて表示していき、全国建設業協会が定める安全書簡のひな形「全建統一様式」には特に基準がなく、いつの色を使うかは各現場が独自に決めています。

比較的多いのが「ミキアシ(緑)キ(黄)ア(赤)シ(白)」または青を加えた「ミキアシア(赤)シ(白)」または青を加えた「ミキアシア(赤)シ(白)」

色で配送場所を明確に

現場では日常的に、運送会社から金物、資材、事務用品などさまざまな配送物が運ばれます。大抵は配送場所をプレハブ倉庫などに指定していますが、倉庫の表記は「A・B・C」などアルファベットが主流のため、間違えて倉庫に配達されてしまうことが多々あります。間違えて倉庫に配達されてしまうことが多々あります。間違えて倉庫に配達されてしまうことが多々あります。間違えて倉庫に配達されてしまうことが多々あります。

車両の色にも色を

車両の自主点検日を明示したプレートにも色を取り入れたところがあります。フォークリフトや高所作業車など、月次検査の点検日は数字のみで表示されているため、遠目に分かりにくく一瞬での理解が難しいというデメリットがあります。例えば、その月のワイヤ点検の色に合わせた「数字+点検色」のプレートに行くと、遠くからでも同時に判断しやすくなると思います。フォークリフトなどの整備不良は深刻な事故の原因

になりにくいので、点検をしっかりと行い、それを色で可視化するというプロセスを取り入れると、安全意識がさらに高まるのではないのでしょうか。

現場では日常的に、運送会社から金物、資材、事務用品などさまざまな配送物が運ばれます。大抵は配送場所をプレハブ倉庫などに指定していますが、倉庫の表記は「A・B・C」などアルファベットが主流のため、間違えて倉庫に配達されてしまうことが多々あります。間違えて倉庫に配達されてしまうことが多々あります。間違えて倉庫に配達されてしまうことが多々あります。間違えて倉庫に配達されてしまうことが多々あります。



ような目印を配置したり、色でエリア分けしたり、現場の配置図を把握し現場内に表示したりすると、目的の場所までたどりつきやすくなります。

実例として、建物内の床に行きたい場所へ誘導するよう色ごとに異なるラインを配置し、「休憩室へは黄色ライン」「打ち合わせ、新規入場は水色ライン」といった工夫もあられます。こうした現場は作業員の心理的な負担を減らし、心のゆとりをつくり出します。一目で分かりやすい現場は、安全性の高い現場でもあります。



建設現場の安全管理に役立つ色彩活用についてお話ししていきます

第1回 色彩活用が遅れる建設現場 2023/6/6 掲載

読者の皆さま、はじめまして。色彩専門家の南涼子と申します。私は元々介護福祉、医療分野の色彩デザインや監修を専門とし、視覚機能の低下した高齢者や認知症の高齢者のため安全で快適な環境づくりに長年取り組んできました。建設現場については数年前、場内誘導や監視業務に8カ月間携わったことがあります。そこで安全という視点から現場における色彩の使われ方について多くの気づきを得ました。そうした経験を踏まえ、数回にわたって建設現場の安全管理や作業の効率化に役立つ「色の使い方」についてお話したいと思います。

◆ ヒヤリハット防止に役立つ色の効果

私たちの日常において色は、情報（ビジュアル・コミュニケーション）として機能しています。視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚の五感のうち、情報の約9割は視覚によってもたらされ、色彩はその大半を占めています。また色は遠くからでも容易に認識できるだけでなく、文字や形、動きに比べて最も早く伝わる情報です。色彩は目に入る複数の情報を一瞬に判断できるという点でも極めて有効で、〈区別〉〈識別〉〈認識〉〈予測〉を促す重要な役割を担っています。さらには現場に潜む危険を色で可視化することにより、作業員の注意喚起と危険予知を促し「ヒヤリハット」を未然に防ぐのにも大いに役立ちます。

色彩が人間の行動全般に深く関わっていることは、近年世界各国の大学や研究機関のデータでも明らかになってきました。色は人間の感情だけでなく、思考や判断、行動に大きく関与しており、生理的には交感神経や自律神経の働き、ホルモンの分泌、血圧、心拍数、呼吸数、集中力、睡眠の質、疲労の回復にも影響を与えます。意識する・しないにかかわらず、色は体のコンディションと仕事のパフォーマンスを左右するため、うまく使えば間違いなく不安全行動や危険行動の回避に役立ちます。

他業種では、工場などで色彩を効果的に取り入れている事例が多く見られます。例えばヤマハ発動機では、無機質で冷たい雰囲気になりがちな工場空間を心理学の観点から配慮した色彩計画によって改善し、快適で安全な作業環境を実現しています。この事例では労働効率が向上しただけでなく、不良品を減少させる効果が確認されています。また私自身が手掛けた事例としては、タンカー乗務員の個室に色を取り入れてストレス軽減を図り、業務の効率化と安全性の向上に役立てるといった試みもあります。

高齢者施設や医療施設でも、色彩は「ヒヤリハット」の防止に多く取り入れられています。入居者や患者の転倒防止、職員の疲労軽減などにも役立つと考えられ、最近では積極的に採用されるようになりました。

公共の場では、駅のホーム先端に赤系統の色を使ったCP（Color Psychology=色彩心理）ラインが近年多く設置されるようになり、“歩きスマホ”で注意力が散漫になっている人や泥酔者、視覚障害者の転落防止など安全管理に役立てられています。また駅や踏切における列車への飛び込み対策として、2008年に「青色灯」が東京の山手線全29駅に設置され、12年には自殺者数が平均約84%減少したという東京大学のデータも報告されています。こうしたことから見ても、色は人間の行動に少なからず影響を与えていることが分かると思います。

◆ 色は万国共通の「言語」

さて、建設現場では安全区分や階段、段差などに目立つ色でマーキングするなどの対策こそ見られますが、まだ積極的で効果的な活用には至っていないのが実情です。独自に色の基準を設けているところもありますが、現場によってそのルールはまちまちです。昨今作業員の高齢化や国際化が進んでいますが、そうした人たちがより働きやすく、安全に作業するためにも、色彩の扱い方の効率化や統一が必要だと思えます。色は万国共通の「ユニバーサルランゲージ」としての機能を持っています。現在多くの企業に取り組んでいる「SDGs（持続可能な開発目標）」や「ダイバーシティ&インクルージョン」といった観点からも、建設現場の色使いへの配慮や基準化は不可欠と言えるでしょう。

次回から、具体的な事例を交えて現場における効果的な色彩活用法について提言していきます。



クレーンを色分けすることで現場の安全性が高まる

第2回 ゲートの色分けで視認性アップ 2023/6/13 掲載

色彩専門家の南涼子です。連載2回目となる今回から、具体的に現場で色をどう役立てるかについてお伝えしていきます。

前回、建設現場の場内誘導に携わったこととお話しましたが、その経験からゲートの視認性（目で見たときの確認のしやすさ）の改善が必要だと感じました。大規模な建設現場では入場ゲートが複数設置されていますが、間違ったゲートに車両が入ってきてしまうことがしばしばあります。こうした場合、他の搬入車両の進行を妨げることにもなりかねず、ドライバーも誘導員も混乱してしまい、その焦りから接触事故のリスクが高まります。ドライバーもいら立つことが多く、スペースに余裕がない現場では方向転換するのに一苦労といったケースに多々出くわしました。

実際、間違っ進入した搬入ドライバーから「周りの交通状況に気を取られているからアルファベットや数字だけでは分かりにくい」という声を何度も聞きました。特に初めて行く現場ではそうしたケースが顕著にあるようです。

建設現場の入場ゲートの多くはアコーディオン（蛇腹）スタイルの形状をしており、その色はほとんど白またはシルバー系です。複数のゲートを設けなければならない現場では、識別性と視認性を高めるための色分けが望ましいと思います。

例えば道路から見えるよう入場ゲートごとに色の異なるカッティングシートを貼る、あるいは色の異なる標識や大きな旗を設置するなど、工夫次第で安価に色分けを行うことは可能だと思います。目的のゲートを視覚的に分かりやすくすることは、搬入ドライバーのストレス軽減につながり、現場内でも落ち着いて安全運転を心掛ける心理状況をつくり出せるはずです。

◆ 国際化に備えゴミ箱の色分けも

次に色彩を活用したいのが産廃ブースのゴミ集積箱の色です。現在建設分野では約 11 万人の外国人が作業に従事しており、その国籍はベトナムをはじめ 10 カ国以上に上ります。国際化が進む今、現場でも多様性に対応する必要性が生じており、特にゴミの分別については頭を悩ましていると聞きます。

建設現場のゴミ集積箱の種類は大体 8～12 項目ほどで、ゴミの細かいルールを多言語で伝えるのはそう簡単ではありません。集積箱に直接文字で表記するにしても、それだけの種類の言語を表示できるはずもなく、現実的ではありません。

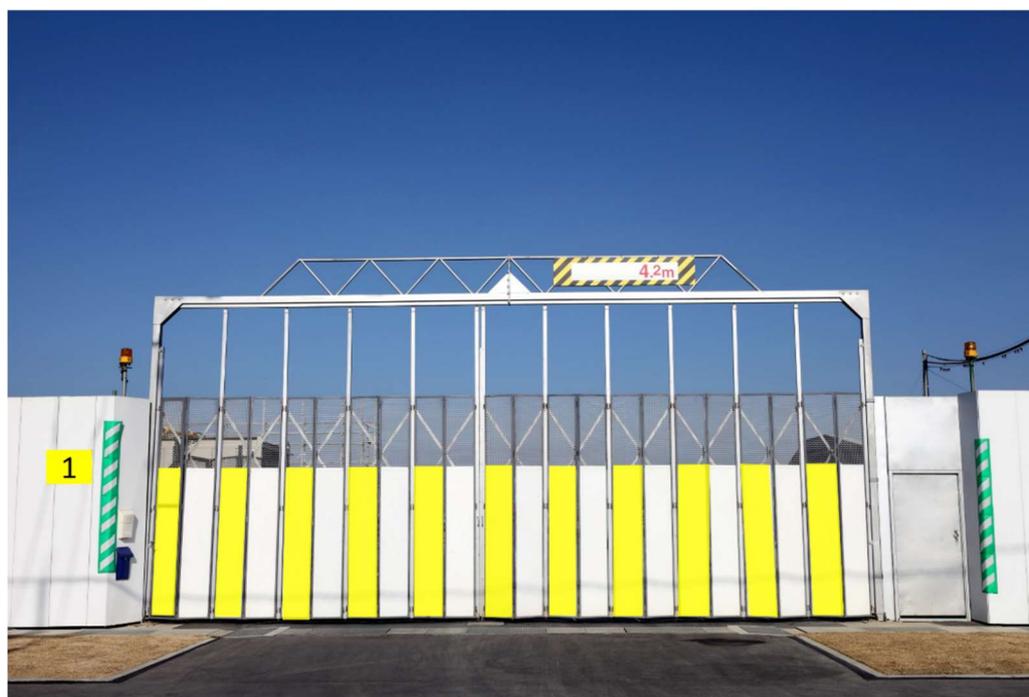
ゴミ集積箱は色そのものを変えるか、ふたをカッティングシートや塗装で目立つように色分けすることをお勧めします。色分けした上で、どの色のゴミ箱に何を捨てるかを各国語で具体的に明記した指示書を渡せば、現場サイドとしても手間を掛けずに円滑に周知できると思います。

◆ パイロンの色もルール化

パイロン（カラーコーン）の色にも着目してみましょう。危険区域に赤、安全通路に緑、資材置き場に青などとルールを設けているところもありますが、現場によってバラバラで、使われる色も場所によって通路確保なのか立入禁止エリアなのか統一性がないことが多いようです。また赤いパイロンを並べた中に緑や黄色、オレンジ、青が混じっているケースもよくありました。「とりあえず」その辺にあるパイロンを置いておいたという感じです。

色の意味を明確にして一貫性を持たせ、全ての現場で統一すれば、危険エリアと安全エリアを区別しやすく、安全か危険かが一目瞭然「見える化」するはずです。色は潜在意識にも働き掛けるため、意味を明確にして統一すれば、安全に対する意識をより一層高められると考えます。パイロンでの色分けがしっかりできている現場は、危険エリアへの立入り事例がほとんど見られず、事故が少ないことも分かっています。

大手ゼネコンなどでつくる建設労務安全研究会によれば、同じ色のパイロンで作業通路、立入禁止区域等を区別していた現場に3色のパイロンを使って、「赤色を作業ヤード・危険区域」「青色を資材置場」「黄色を安全通路」と定めたところ、安全通路・危険区域等を色で明確に識別できるようになり、接触事故などを未然に防ぐ安全な作業現場となったと報告されています。



ゲートを色分けするだけで視認性が格段に向上する

第3回 ワイヤ点検でも色活用 2023/6/20 掲載

厚生労働省と中央労働災害防止協会が定めた安全衛生管理マニュアルによると、現場パトロールの役割は「主に目で見て分かる不安全要素について、現場に存在する顕在化した、あるいは潜在化している災害の芽をチェックリストを用いて確認し、探し、つぶすこと」としています。目で見て分かる不安全要素を明確にする上で、色は非常に効果的な手段です。

その一つに「ワイヤロープの点検色」があります。建設現場では、クレーンの吊荷など楊重に必要なワイヤロープの点検が正しく行われたかどうか、「点検色」を設定し明示するのが一般的です。ほとんどの現場では「週」や「月」などで赤・青・黄といったビニールテープをワイヤに巻いて表示していますが、全国建設業協会が定める安全書類のひな形「全建統一様式」には特に基準がなく、いつ何色を使うかは各現場が独自に決めています。

比較的多いのが「ミギアシ=ミ(緑)ギ(黄)ア(赤)シ(白)」、または青を加えた「ミギアシアオ」という取り決めです。さらにオレンジ色を加えたりすることもあります。こうした状況下では、同じ月でも「A現場では緑色、B現場では赤色」といったケースがあり、複数現場を掛け持ちする作業員がテープの巻き直しを迫られて大変な思いをした、けがをしたという話をよく聞きます。そのほかにも、他現場から来た新規入場者が困惑して間違えてしまい、事故につながる危険が少なくありません。業界全体で話し合い「○月は○色」「○週目は○色」といったガイドラインを設けてはいかがでしょうか。

玉掛ワイヤロープの点検色			
緑	1月	5月	9月
黄	2月	6月	10月
赤	3月	7月	11月
白	4月	8月	12月
赤	1月	5月	9月
黄	2月	6月	10月
青	3月	7月	11月
白	4月	8月	12月

◆ 車両の点検表示にも色を

車両の自主点検期日を明示したプレートにも色を取り入れたいところです。フォークリフトや高所作業車など、月次検査の点検期日は数字のみで表示されているため、遠目に分かりにくく一瞬での理解が難しいというデメリットがあります。例えば、その月のワイヤ点検の色に合わせた「数字+点検色」のプレートにすると、遠くからでも瞬時に判断しやすく安全管理が行いやすいので、色を活用してほしいという声をしばしば耳にします。

フォークリフトなどの整備不良は深刻な事故の原因になりかねないため、点検をしっかりと行い、それを色で可視化するというプロセスを取り入れると安全意識がさらに高まるのではないのでしょうか。

◆ 色で配送場所を明確に

現場では日常的に、運送会社から金物、資材、事務用品などさまざまな配達物が運び込まれます。大抵は配送場所をプレハブ倉庫などに指定していますが、倉庫の表記は「A・B・C」などアルファベットが主流のため、間違った倉庫に配送されてしまうことが多々あります。誤配送によって作業員が資材を探

し回る手間が増え、作業の遅れにつながることもよくありました。これも色彩区分を取り入れることにより、円滑で安全な配送を実現できると考えます。

過去の事例として、電話でクランプの段ボール箱 15 個をB倉庫へ搬入するよう指示したところ、配達員が聞き間違えて型枠大工用のE倉庫に配達してしまったことがありました。型枠大工はそのクランプを自分のところへ配達されたものと勘違いして使ってしまう、外周囲いの移動が2日も遅れるというトラブルに発展しました。このような間違いが起きないように、倉庫をプレートの色で識別できるようにし「配達場所は赤いプレートの倉庫」などと指示すればトラブルを防ぎやすくなります。

◆ 場内もエリア別に色分け

また、前回お話ししたような複数の入場ゲートがある現場、複数の建物を施工している大型現場では、自分の位置を正確に把握できないことがよくあります。こうした場合、現場内をゲートの色と併せて把握できるような目印を設置したり、色でエリア分けしたり、現場の配置図を仮囲いや現場内に表示したりすると、目的の場所までたどりつきやすくなります。

実例として、建物内の床に行きたい場所へ誘導するよう色ごとに異なるラインを配置し、「休憩所へは黄色ライン」「打ち合わせ、新規入場は水色ライン」といった工夫もあります。こうした環境は作業員の心理的な負担を減らし、心のゆとりをつくり出します。一目で分かりやすい現場は、安全性の高い現場でもあります。



倉庫のドアを色分けするだけで誤配送が防げる

第4回 棟別カラー表示で混乱回避 2023/7/4 掲載

今回も引き続き建設現場における色彩活用の具体策をお示しします。

これは私自身の体験でもあるのですが、初めて行く現場でまず困るのは、不明点を誰に尋ねればよいのか分からないことです。例えば、複数棟の工事が同時並行で進んでいる現場に入ったとします。「D棟のN監督に作業内容を確認してください」と指示されます。そこで起こる疑問は「D棟ってどこ？」「N監督ってどの人？」です。これは多くの作業員が経験していることだと思います。

とりあえず目に入った監督に尋ねてみます。「俺、そこの担当じゃないから分からない」…返ってきた答えがこれではどうしてよいのか分かりません。もし「赤い旗の棟（D棟）で、赤い腕章をしている監督にN監督の居場所を尋ねてください」と指示されれば分かりやすいはずですが。

そこで、これを発展させていくつか具体策を提案します。① 各棟の色分け（棟ごとのカラー表示）② 各棟専属の監督の腕章色分け（棟と同じ色にする）③ 監督の担当業務の色分け（躯体担当は赤バッジ、設備担当は青バッジ…）などです。こうした色彩活用で、新規入場者やまだ日の浅い作業員に安心感を与えることができるでしょう。

さらに、作業手順書についても提案です。作業内容のフローチャートにチェック項目を設けて、達成率を赤・黄・青のペンで塗りつぶします（例えば判断に要した時間の経過などを色分けする）。手順書を回収した監督は色を見ただけでどこに問題点があるか一目で判断でき、データ化も可能でしょう。

建設業においても「働き方改革」が急務となっている現在、業務効率化による時間短縮は喫緊の課題です。多くのプロセスを単純化・明確化することは安全対策にも大いに役立つはずですが。

◆ 無意識に作用する《色》の効果

さて、ここからは、これまで示してきた色彩活用法を認知心理学の観点から少し掘り下げたいと思います。

安全を考える上でまず重視されるのが「ヒューマン・ファクター」（人間の行動特性に基づく人的要因）です。人間は何かを行う時、意識的に行動するものと考えられていますが、無意識や本能で行動することも少なくありません。意識することで注意力を高めて危険を回避する…当たり前の話ですが、作業中、常にそのように明晰な意識状態を保ち続けられるのならば問題はありません。注意の対象範囲が広がり事故の確率も少なくなるでしょう。しかし、人間はそこまで完璧な意識状態を持続することはできません。

そこで問題になるのが無意識の行動です。私たちの行動は〈認知・確認〉→〈判断・決定〉→〈操作・動作〉という順序で進むため、入り口である〈認知・確認〉を左右する《色》は大変重要です。ぜひ「無意識に働き掛ける色の力」に注目していただきたいと思います。

道路信号を例に考えてみます。あなたが自動車を運転しているとしましょう。交差点が近づき信号機が見えてきました。青から黄色、黄色から赤へと信号が変わった時、あなたは戸惑うことなく停止線で止まるはずですが。「赤は止まれ、黄色は注意、青は進め」…わずか3色で日本全国の交通が制御されて

いるわけです。

このような色情報による行動は生活の中で自然と身に付き、頭で考えずとも無意識に行動へとつながっています。ここで大切なのは「共通認識」です。それがあからこそ信号の色が万人に機能するので。これが色彩心理の活用原理です。

この原理を建設現場にも応用してみましょう。前回提案したワイヤロープの点検色のほか、転落防止のための揺止めワイヤの色、段差を意識させるマーキング、パイロンの色、作業区画の色分け、安全帯フック取付け場所の色による識別など、色は一目瞭然の「見える化」を可能にし、本能と無意識に働き掛けます。次回はさらに突っ込んで提言します。



棟ごとに監督員の腕章を色分けし、担当業務もバッジで色分けすれば、作業員が迷うことも少なくなる

第5回 今こそ問われる現場の色彩基準 2023/7/11 掲載

前回は認知心理学の観点から「無意識に働き掛ける色」の力と重要性、目に見えない情報を可視化する色彩活用の原理、そしてそれを現場の安全に生かす具体策をお話しました。今回は、個々の現場ではなく「全建設業」「オールニッポン」の視点から、どのように色彩を活用すれば業界全体で安全性を向上させられるのか、その原理と新しいシステムについて提言いたします。

現在の建設業界は企業ごと、現場ごとに独自の方法で安全対策を行っています。そのため、現場によって色の使い方や意味が異なり、複数現場を掛け持ちしている作業員には一瞬で判断できないというケースがしばしばあります。もし全国全ての現場で色を統一できれば、作業員は一瞬で理解が可能になり、無意識に判断して行動できるようになるでしょう。

ここで、建設現場における安全対策の現状を見ておきましょう。現場で通常行われている安全活動としては、①安全朝礼 ②安全ミーティング ③作業開始前点検 ④作業所長巡視 ⑤安全工程打合わせ ⑥持ち場後片付け ⑦終業時確認…などがあります。

そのほかにも「1人KY（危険予知活動・訓練）」などさまざまな安全対策が講じられており、作業員は本来の担当作業のほか、こうした対策に多くの時間を割いています。いずれも安全確保に不可欠で、各種法令に実施が定められているものも少なくありません。

ある職人（親方）によると、1週間のうち作業以外の安全対策に費やす時間を集計したところ18時間15分だったそうです。この時間は法定労働時間の2日分を超えています。安全を確保するために、こんなにも多くの時間を割かなければならないのでしょうか。現実には、ここまで時間をかけても労働災害ゼロはいまだ実現していません。

わが国は世界でも「安全」を重視している国と考えられていますが、実際はそうとも言い切れません。2018年の建設職人基本法超党派国会議員フォローアップ推進会議有志欧州視察団の報告によると建設業の労働災害による死亡者数は、ドイツの3倍、英国の5倍にも上りました。こうした状況を打開するため、安全対策における〈新たなシステム〉の構築が急務だと考えます。

◆ 新たな安全システムの構築を

新たなシステムとは「無意識に働き掛ける色」の原理、つまり認知心理学に基づく「色彩心理」の活用です。この原理を応用して日本全国の現場（工場なども含む）で共通ルールを定めるのです。これまで例示してきたように「赤いパイロンは立入り禁止」「青いパイロンは安全通路・安全エリア」「黄色いパイロンは資材置き場」「緑のパイロンは養生中」などと全国で共通ルール化すれば、無意識かつ直観的に判断できるようになります。最終的には日本中どここの現場でも「赤いパイロンのエリアは命が危ない」と瞬時に感じ取れるようになれば目的達成です。

さらに安全確認や定期検査で使われている指標にも全国共通の色彩ルールを取り入れます。ワイヤロープも「8月は赤テープ」「9月は黄色テープ」などと全国で統一するのです。日本中の現場が共通点検カラーを持つことで、複数の現場を掛け持ちする作業員や多数の現場を回るユニック車などが混乱な

く安全確認できるようになるでしょう。色の基準を設けて統一し徹底することは、日本の建設現場を安全に導く大きな鍵となるはずで

す。こうした共通ルール化には、安全対策の基準や項目の洗い直し・見直しが求められます。新たな教育プログラムやカリキュラムも必要となるでしょう。面倒に感じる方も多いかと思

います。しかし、このルール化によって安全対策がより身近なものとなり、作業員が困惑したり焦ったりするケースが減るはずで

す。その結果、実作業以外に費やす時間を短縮できるでしょう。見直しには手間と時間がかかるかもしれませんが、ぜひ業界一丸となってチャレンジしてみたいか



朝礼での安全確認風景。現場では作業以外の安全対策に多くの時間と労力を割いている

第6回 労災ゼロへ《ユニバーサルカラー》の導入を 2023/7/18 掲載

これまでの連載を通して「色の役割」に始まり「色彩による視認性と識別性の向上」「色彩活用による現場作業と業務の効率化」「無意識に働き掛ける色の力」「色の共通ルール化」などを提言させていただきました。最終回となる今回は当協会の名称でもある《ユニバーサルカラー》の視点から「色の可能性」について提言したいと思います。

ユニバーサルカラーとは、全ての年齢や能力の人に対して可能な限り使いやすいデザインを提供する色を意味します。つまりどんな人にも分かりやすく、安全で快適な環境を可能にする色彩です。

これまで「ユニバーサル」という観点から色が取り上げる場合は、主に色覚特性（色覚障害）者や弱視者に焦点が当てられてきました。全国の自治体では色覚特性者にも見えやすいチョークの色やパンフレットの色使いなどを奨励、導入する事例が見られます。

しかし私が提唱するユニバーサルカラーは、色覚特性者や弱視者にとどまらず、高齢者や多様な国籍の人々、一般の人々など全てを対象としています。現在当協会では防災に役立つ色彩活用について研究を進めており、災害から命を守る観点からもユニバーサルカラーを提唱しています。色は「安全をデザインする」に当たって非常に有効な手段なのです。

しかしながら、実際には「そんなに色が役立つの？」という疑問を抱かれる方が多いことでしょう。建設業界でも色を取り入れる重要性についての認識・理解はまだ進んでいません。そこで、以前から色彩を積極的・効果的に活用している航空業界の例を紹介します。

◆ 空では色彩活用が当たり前

初のジェット旅客機が就航したのは1952年、ロンドンーヨハネスブルク間でした。今からたった71年前の話です。しかし、このわずかな間に航空業界は事故からの教訓をもとに安全対策の徹底に努め、安全性が格段に向上しました。現在1日に日本では約5,900機、世界では約22万5,000機もの旅客機が飛んでいます。これほど多いのに航空機同士の衝突事故が限りなく少ないのはなぜでしょうか？そこに大きく貢献しているのが色彩です。航空業界において色の活用は人間工学に基づく重要な要素であり、ヒューマンエラーを最少に抑えるために不可欠と考えられています。

例えば、どの航空機にも設置が義務付けられているナビゲーションライト（航空灯）がその代表です。このライトの色は、進行方向に向かって左の主翼が赤、右が緑と定められています。この色によって接近してくる他機や近くを飛んでいる他機の進行方向が分かります。パイロットや管制塔、管制官、地上支援要員が機体の位置と方向を把握するのに役立つため「ポジションライト」とも呼ばれています。

このライトは1830年代に船舶で使われたのが始まりです。かつて交通量の多い航路で衝突事故が頻発したことから、ポジションライトが実験的に導入されました。その結果、船舶同士の衝突が大幅に減ったため、後に航空機にも採用されることになったのです。

ほかにも滑走路の表示や誘導灯、無線故障時に航空機へ指示を送る指向指示灯、航空障害灯などがありますが、その色に関しては統一ルールが厳格に定められており、世界共通仕様、つまり《ユニバーサ

ルカラー》となっています。もちろん色彩以外にもさまざまな安全対策が重層的に取られており、互いに補い合って空の安全を作りだしています。

さて、建設業界に話を戻しましょう。日本の土木・建築物の安全性や施工技術は世界トップレベルと評価されています。ではなぜ工事中の事故がなくなるのでしょうか。データでは昭和-平成-令和と事故件数が減っていますが、近年はほぼ横ばいです。ここが安全の限界なののでしょうか。いいえ、まだまだ取り組むべきこと、取り組めることがあるはずです。この限界を超えてこそ「安全」と言えるのではないのでしょうか。それを実現するツールの一つが《ユニバーサルカラー》です。

もちろん「色の活用」だけで現場の安全が完璧に確保できるわけではありません。飽くまでさまざまな対策の一環に過ぎません。しかし航空業界の例を待つまでもなく、色は安全を実現する上で欠かせない要素です。

長年〈色の効果〉を実感し検証してきた色彩専門家として自信を持って提言いたします。色彩を意識的かつ効果的に取り入れることで、これまで以上に安全意識が高まり、労災の撲滅に一步も二歩も近づくことでしょう。ぜひ、そのための一步を業界挙げて踏み出していただきたいとお願いし、いったん筆を置きます。

(おわり)



都心の大型現場で8カ月間安全誘導員を務めた時の筆者。その経験から今回の提言に至った

連載を終えて

「建設業界の安全」について「色」という視点から提言を行った今回の連載は、私が以前から取り組んでみたかったテーマでした。きっかけは2019年に従事した建設現場での業務です。《ユニバーサルカラー》を提唱する色彩専門家として建築デザインに関わっていることから、建物がどのようなプロセスで完成し、その現場がどのようなものなのかを知りたいという思いがありました。

本業と掛け持ちで、約8カ月近く建設現場に立ち、クレーンやフォークリフトの監視員、作業員への危険周知、車両の場内誘導など安全を守る仕事を実践として行う中、「現場の安全と色彩」について多くの気づきを得ることができました。また建設現場の標識などにはJIS(日本工業規格)のJIS安全色が使用されていますが、現実的にはそれが十分に機能しておらず、効率的に活かされていないことも知りました。

この度の連載は、安全における色の重要性を建設業界、さらには社会に知っていただく重要な布石、一歩になったと思います。この先々は安全をつくるための色の定義づけと体系化を行い、《ユニバーサルカラー》を世に広めることが私の使命であると考えています。建設現場や防災関連分野で、当たり前のように色が実践的に活用される世界が日常の光景となることを心より願います。

最後となりましたが、今回貴重な機会をくださった日刊建設通信新聞社様に心より感謝申し上げます。

2023年7月 南 涼子

南涼子の著作一覧



介護に役立つ
「色彩」活用術
(現代書林) 2003



介護力を高める
カラーコーディネート術
(中央法規出版) 2007



一瞬で心が整う
「色」の心理学
(青春出版社) 2022



今と未来がわかる
色彩心理
(ナツメ社) 2022



色彩心理
配色アイデアブック
(ホビージャパン) 2023

南涼子著 〈一瞬で心が整う「色」の心理学〉

色の力で、仕事・人間関係・暮らしの質を上げる

病院や老人ホームの壁という一般的なには「白」を連想する。白は清潔感があり明るいのでよく使われるのだろう。しかし筆者によると、白だけの空間は健康にかえってマイナスだという。なぜなら、白はまぶしすぎるため人を疲れさせるからだ。また、白がもたらす清潔感が「汚してはならない」という緊張感をもたらすストレスの原因にもなるという。

筆者は（一社）日本ユニバーサルカラー協会の理事長で、医療機関や福祉施設のカラーコーディネーターも手がける色彩計画の専門家。本書は生活のさまざまな場面における色の効果的な使い方を紹介したものだが、単なる感覚論によることなく、一つひとつ科学的かつ客観的な根拠や研究結果を示しながら例示している。感覚的で不確かと思われがちな色について、新しい視点が得られる良書だ。

建築計画において色はデザイン上の重要なポイント。色彩計画をより充実させるためにも一読をお勧めしたい。タイトルと体裁（新書版）だけ見ると流行のノウハウ本だが、その域を超えている。

（青春出版社 1,199 円 税込み）



病院や老人ホームの壁という一般的なには「白」を連想する。白は清潔感があり明るいのでよく使われるのだろう。しかし筆者によると、白だけの空間は健康にかえってマイナスだという。なぜなら、白はまぶしすぎるため人を疲れさせるからだ。また、白がもたらす清潔感が「汚してはならない」という緊張感をもたらすストレスの原因にもなるという。

一瞬で心が整う「色」の心理学
色の力で、仕事・人間関係・暮らしの質を上げる
南涼子著、青春出版社、1,090円＋税

筆者は日本ユニバーサルカラー協会の理事長で、医療機関や福祉施設のカラーコーディネーターも手がける色彩計画の専門家。本書は生活のさまざまな場面における色の効果的な使い方を紹介したものの、単なる感覚論によることなく、一つひとつ科学的かつ客観的な根拠や研究結果を示しながら例示している。感覚的で不確かと思われがちな色について、新しい視点が得られる良書だ。

建築計画において色はデザイン上の重要なポイント。色彩計画をより充実させるためにも一読をお勧めしたい。タイトルと体裁（新書版）だけ見ると流行のノウハウ本だが、その域を超えている。

2022年10月26日 009面 01版 No.08



南涼子著 〈今と未来がわかる色彩心理〉

ナツメ社が刊行している人気のビジュアル図鑑シリーズに新しい1冊が加わった。今回は色彩心理がテーマ。著者の南涼子氏は介護施設の色彩計画からスタートし、さまざまな分野のカラーデザイン、コーディネートを手掛けるその道の第一人者で、(一社)日本ユニバーサルカラー協会の理事長。

本書では、色彩学の基礎的かつ科学的な知識から始まり、国や文化による色の扱い方・捉え方の違い、各色が持つイメージと心理的効果、さらに衣食住など実生活での実践的な使い方まで、科学的根拠と豊富な実例を示しながら幅広く紹介している。

建築や土木の設計分野でも色は、施設のイメージや雰囲気、快適さを左右する重要なポイントだが、現実には設計者などの個人的あるいは一方的な感性に基づいたデザインが多く、科学的裏付けをもって計画されるまでに至っていない。色彩の対する認識がまだまだ感性レベルにとどまっているとも言えよう。

いま一度、色が持つ固有の性格や効果を確認しながら色彩計画を進めるためにも一読をお勧めしたい。オールカラーで視覚的にも理解しやすい。

(ナツメ社 1,760円 税込み)



「今と未来がわかる色彩心理」発行
ナツメ社、南涼子著
ナツメ社が刊行している人気のビジュアル図鑑シリーズに新しい1冊が加わった。今回は色彩心理がテーマ。著者の南涼子氏は介護施設の色彩計画からスタートし、さまざまな分野のカラーデザイン・コーディネートを手掛けるその道の第一人者で、日本ユニバーサルカラー協会の理事長。

本書では、色彩学の基礎的かつ科学的な知識から始まり、国や文化による色の扱い方・捉え方の違い、各色が持つイメージと心理的効果、さらに衣食住など実生活での実践的な使い方まで、科学的根拠と豊富な実例を示しながら幅広く紹介している。

建築や土木の設計分野でも色は、施設のイメージや雰囲気、快適さを左右する重要なポイントだが、現実には設計者などの個人的あるいは一方的な感性に基づいたデザインが多く、科学的裏付けをもって計画されるまでに至っていない。色彩の対する認識がまだまだ感性レベルにとどまっているとも言えよう。

いま一度、色が持つ固有の性格や効果を確認しながら色彩計画を進めるためにも一読をお勧めしたい。オールカラーで視覚的にも理解しやすい。(ナツメ社、1,760円 税込み)



南涼子著 〈色彩心理 配色アイデアブック〉

(一社)日本ユニバーサルカラー協会代表理事で色彩専門家の南涼子氏が昨年12月に続き新著を刊行した。この1年間で3冊目となる今回の著作は『色彩心理 配色アイデアブック』。さまざまなカラーデザインに生かせる実戦的なマニュアルだ。

同氏が20年にわたる実践と研究で蓄積した知見をもとに、色が持つ心理的側面から効果的で創造的な配色法を例示している。単なる感覚や雰囲気だけで配色例を並べただけの事例集と異なり、科学的根拠に基づいて構成しているところが類書と違う同氏ならではの特徴だろう。

まず、基本となる12色(赤、ピンク、オレンジ、黄、緑、空色、青、紫、茶、白、灰、黒)について、それぞれの性格や特徴、心に及ぼす影響などを解説している。その上で、心理的效果の観点から各色に3つのキーワードを設定している。例えば、赤なら「情熱」「ダイナミック」「ラグジュアリー」、青なら「深遠」「気品」「ダンディ」といった具合だ。さらに、各キーワードを12ないし13の関連キーワードに細分化し、それぞれにマッチした配色例を美しい画像で紹介している。

実際の配色作業に欠かせないCMYK値やRGB値、ウェブ表示用のHTMLカラーコードももちろん掲載している。複数色を掛け合わせる場合の効果的な配色法など、建築の内外装や商品デザインを含めさまざまな分野のデザイナーにとって即戦力となるアイデア帖だ。

(ホビージャパン 2,310円 税込み)



日本ユニバーサルカラー協会代表理事で色彩専門家の南涼子氏が昨年12月に続き新著を刊行した。この1年間で3冊目となる今回の著作は『色彩心理 配色アイデアブック』。さまざまなカラーデザインに生かせる実戦的なマニュアルだ。

同氏が20年にわたる実践と研究で蓄積した知見をもとに、色が持つ心理的側面から効果的で創造的な配色法を例示している。単なる感覚や雰囲気だけで配色例を並べただけの事例集と異なり、科学的根拠に基づいて構成しているところが類書と違う同氏ならではの特徴だろう。

「色彩心理 配色アイデアブック」発行

ホビージャパン、南 涼子著

まず、基本となる12色(赤、ピンク、オレンジ、黄、緑、空色、青、紫、茶、白、灰、黒)について、それぞれの性格や特徴、心に及ぼす影響などを解説している。その上で、心理的效果の観点から各色に3つのキーワードを設定している。例えば、赤なら「情熱」「ダイナミック」「ラグジュアリー」、青なら「深遠」「気品」「ダンディ」といった具合だ。さらに、各キーワードを12ないし13の関連キーワードに細分化し、それぞれにマッチした配色例を美しい画像で紹介している。

実際の配色作業に欠かせないCMYK値やRGB値、ウェブ表示用のHTMLカラーコードももちろん掲載している。複数色を掛け合わせる場合の効果的な配色法など、建築の内外装や商品デザインを含めさまざまな分野のデザイナーにとって即戦力となるアイデア帖だ。

(ホビージャパン、2,310円・税込み)

2023年04月06日 010面 01版 No.03



科学的に「色」の効果、解き明かす

『ビジュアル図鑑 今と未来がわかる色彩心理』

(一社) 日本ユニバーサルカラー協会 代表理事 南涼子さん

昨年12月に刊行された本書は、色に関する基礎的かつ科学的な知識を整理した上で、その社会的役割や心理的な効果を具体的な根拠・エビデンスに基づいて紹介した入門書。国や文化による色の捉え方の違い、街中で目にする標識やサインの色使いなど、色の持つ魅力をさまざまな角度から教えてくれる。中でも、北から南まで日本各地の緯度による色の見え方や使い方の違いについて紹介した第3章はなかなか興味深い。「色とともに旅する気持ちで書きました。思わず誰かに話したくなるようなエピソードも盛り込んだので、色について考えるきっかけになれば」と語る。

広告制作会社に勤めていた20代の頃、イベント会場でブースのカラーデザインによって集客数が変わること気付いたのが色彩計画との出会いだった。そこで一念発起、色彩について一から勉強し色彩検定1級を取得した。「当時はお金に困っていて、消費者金融から借金し車中生活を送りながら勉強しました」と苦学時代を振り返る。

初めは仕事がなかったが、1999年に介護施設からカーテンのリニューアルを依頼された。実際に施設でボランティアしながら入居者とふれあい配色を考えた。まず、身体的介護を要する入居者の部屋には黄色を採用した。黄色は人とのコミュニケーションを促す効果があるからだ。軽度認知症の入居者の部屋には緑を選んだ。緑は心を落ち着かせ安心感をもたらすからだ。さらに、感情を抑えられず攻撃的になりやすい重度認知症の入居者の部屋にはピンクを用いた。ピンクは心を穏やかにしリラックスさせる効果があるからだ。「色彩は生きる上で必要かつ重要な視覚情報です。暮らしに彩りを与え、心を豊かにしてくれます」と説く。

こうした経験を踏まえ、2003年に日本ユニバーサルカラー協会を立ち上げる。「当時、日本でも注目され始めたユニバーサルデザインの考え方を色彩分野にも取り入れたいとの思いから《ユニバーサルカラー》を提唱しました。色の力で、誰もが隔たりなく暮らしを向上させられるようサポートするのが使命です。そのために、私が出持っている知識やノウハウを惜しみなく公開し社会に貢献していきたい」と熱い思いを語る。

その後、医療分野へも活動を広げ、医療機器の配色なども手掛けた。最近ではタンカー船室のカラーデザインも。「一度航海に出ると、同じ空間で何カ月も一緒に暮らすことになります。プライバシーの確保が難しくなり刺激が少ないことも相まって、うつ状態になる乗組員もいるので、色で心を軽くする工夫をしました」

色彩は感覚的で好みに左右される曖昧なものイメージされがちだが、「色の効果は科学的な研究に基づく実証データが豊富にあり、決して曖昧なものではありません。最近では科学的根拠もなく『色には波動があり運気を左右する』といった占いがいの主張も見受けられますが、私は反対に色の効果を客観的・科学的に伝えていきたいと考えています。色は日々の気分や行動・選択・決定に大きく関わり、心身の健康にも影響を与えます。うまく利用することで生活や仕事の質を上げられます」

数年前、建設現場で場内誘導に携わった。現場における色の使われ方を知りたいと思ったからだ。しかし、実際の現場では色が効果的・意識的に活用されていないことに気付く。「安全面や作業環境の面でもっと上手な使い方があると感じました。現場の国際化が進む今こそ、言葉の壁を越えて直感に働きかける《色》を効果的に活用してほしい」と力説する。

「今後も、建築設計や空間設計から建設現場まで、さまざまな場面における色の効果と使い方を発信し、カラーデザインも手掛けていきたいと思っています。そのために、安全大会や社内研修などの講師も積極的に引き受けたいですね」と意欲的だ。

(ナツメ社 1,760円 税込み)



著者と1時間



日本ユニバーサルカラー協会のQRコード

科学的に「色」の効果 解き明かす

昨年12月に刊行された本書は、色に関する基礎的かつ科学的な知識を整理した上で、その社会的役割や心理的な効果を具体的な根拠・エビデンスに基づいて紹介した入門書。国や文化による色の捉え方の違い、街中で目にする標識やサインの色使いなど、色の持つ魅力をさまざまな角度から教えてくれる。中でも、北から南まで日本各地の緯度による色の見え方や使い方の違いについて紹介した第8章はなかなか興味深い。「色とともに旅する気持ちで書きました。思わず誰かに話したくなるようなエピソードも盛り込んだので、色について考えるきっかけになれば」と語る。広告制作会社に勤めていた20代の頃、イベント会場でプールのカラーデザインによって集客数が変わることに気付いたのが色彩計画との出会いだった。そこで一念発起、色彩について一から勉強し色彩検定1級を取得した。「当時はお金に困っていて、消費者金融から借入金し車中生活を返りながら勉強しました」と苦学時代を振り返る。初めは仕事が多かったが、1999年に介護施設からカーテンのリニューアルを依頼された。実際に施設でボランティアしながら入居者とふれあい、配色を考えた。まず、身体的介護



一般社団法人「ユニバーサルカラー」協会代表理事 南涼子さん

を要する入居者の部屋には黄色を採用した。黄色は人とのコミュニケーションを促す効果があるからだ。軽度認知症の人の部屋には緑を選んだ。緑は心を落ち着かせ安心感をもたらすからだ。さらに、感情を抑えられず攻撃的になりやすい重度認知症の入居者の部屋にはピンクを用いた。ピンクは心を穏やかにしリラックスさせる効果があるからだ。「色彩は生きる上で必要かつ重要な視覚情報です。暮らしに彩りを与え、心を豊かにしてくれます」と説く。こうした経験を踏まえ、2003年に日本ユニバーサルカラー協会を立ち上げる。「当時、日本でも注目され始めたユニバーサルデザインの考え方を色彩分野にも取り入れたいとの思いから『ユニバーサルカラー』を提唱しました。色の方で、誰もが隔たりなく暮らしを向上させられるようサポートするのが使命です。そのために、私が持っている知識やノウハウを惜しみなく公開し社会に貢献していきたい」と熱い思いを語る。その後、医療分野へも活動を広げ、医療機器の配色なども手掛けた。最近ではタンカー船客のカラーデザインも、「一度航海に出ると、同じ空間で何カ月も一緒に暮らすことになり

ます。プライベートの確保が難しくなり刺激が少ないことも相まって、うつ状態になる乗組員もいるので、色で心を癒やす工夫をしました」

色彩は感覚的で好みに左右される曖昧なものイメージされがちだが、「色の効果は、科学的な研究に基づく実証データが豊富にあり、決して曖昧なものではありません。最近では科学的根拠もなく『色には波動があり運気を左右する』といった占いがいの主張も見受けられますが、私は反対に色の効果を客観的・科学的に伝えていきたいと考えています。色は日々の気分や行動、選択、決定に大きく関わり、心身の健康にも影響を与えます。うまく利用することで生活や仕事の質を上げられます」

数年前、建設現場で場内誘導に携わった。現場における色の使われ方を知りたいと思ったからだ。しかし、実際の現場では色が効果的・意識的に活用されていないことに気付く。「安全面や作業環境の面でもっと上手な使い方があると感じました。現場の国際化が進む今こそ、言葉の壁を越えて直感に働きかける《色》を効果的に活用してほしい」と力説する。「今後も、建築設計や空間設計から建設現場まで、さまざまな場面における色の効果と使い方を発信し、カラーデザインも手掛けていきたいと思っています。そのために、安全大会や社内研修などの講師も積極的に引き受けたいですね」と意欲的だ。

[制作・著作]

2023



(株) 日刊建設通信新聞社

〒101-0054 東京都千代田区神田錦町 3-13-7

Tel 03-3259-8711

<https://www.kensetsunews.com/>



(一社) 日本ユニバーサルカラー協会

〒158-0085 東京都世田谷区玉川田園調布 1-9-1 壺番館 4F

Tel 03-5755-5735

<http://www.universal-color.jp/>

